



『株式会社フジキン』が創業85周年を迎えられました!!

昭和5年5月に創業され、今年5月に創業85周年を迎えられました
同社 代表取締役会長兼執行役員会長兼CEO 小川洋史様に「トップ
の戦略」等を伺いました。

Q. 今年の5月で創業85周年を迎えられましたが、今後目指される企
業ビジョンや理念はどのようなものですか。

A. 技術グローバル企業に特化した世界戦略を継続して行きます。ま
たフジキンは中心企業（中堅や中小の規模でなく「心」が入って
いる企業）としていわゆる15次産業（1次素材・2次加工・3次
販売・4次サービス・5次情報の総和）を志向しています。

Q. 現在「サービス販売創造企業」へ向けて企業理念の「全宇宙環境
の保安・安全・安心・労働・衛生」を掲げておられますが、もう
少し詳しくお教え願えますか。

A. 85周年は通過点でオリンピック開催にあたる90周年とその次の1
00周年を目指しています。「保安・安全・安心」はISO9001を、
「労働・衛生」はISO14001、OHSAS18001を、情報セキュリ
ティはISO27001を取得して企業理念の実現に日々渾身の努力をし
ています。

Q. 筑波の研究工場でのチョウザメ飼育は可なり成果が出ているとお
聞きしていますが・・・。

A. フジキンの精神であります「創」はマイナスからプラスに持って
行く発想であります。（モノづくりの考えでも「作」は1から、
「造」はゼロからであり「創」とは異なります）。チョウザメは
フジキンのチャレンジ魂のルーツとして“超ちょうざめ”と命名
し、1987年より飼育して現在約10万匹となっています。高級魚で
あり、キャビアを加えたコースメニューもあり、町おこしや料理
店で人気と注目を集めています。

Q. 梅田に竣工しました「グランフロント大阪」でもベンチャーや女
性事業家のために尽力されていますが、VECやこれから起業され
る方々にもメッセージをお願いします。

A. グランフロント大阪にあるゲストルーム「うめきた創庵」は女性
やベンチャーの方々に活用して欲しいと考えています。またフジ
キンの博士（工学）等を講師陣とした“Dr.カレッジ”も開いて
います。関西は戦後、起業や発明が70%以上輩出した地域であり、
日本文化の中心地である京都を核としてベンチャーや起業を応援
することを使命と考えます。縄張り争いをしている場合ではあり
ません。日本の首都は東京でも、本籍は京都です。

Q. 「高野山大学フジキン小川修平記念講座講演会」をはじめCSRに
も注力されています。

これからのお考えをお教え下さい。

A. CSRはフジキンの果たすべき大きな役割の一つです。

高野山大学様関係以外でも「NewテクノマートSO（創）」や
「THE ZEN」の発刊、チョウザメの育成、スーパーカレンダー
の発行、各地万博や博覧会への出展などを行なっています。また、
現在「大阪商工市民駅伝」を検討中で企業と市民が一体となった
新しい形の駅伝を開催し、関西の起爆剤となることを期待してい
ます。

Q. 最後に趣味についてコメントして下さい。

A. 今年のプロ野球のタイガースは球団創設80周年です。大阪タイ
ガースに戻るのも良いですが、この際球団名を野球のメッカ、甲
子園タイガースにすることを提案します。理由は言うまでもなく
全国の野球ファンが望んでいることです。



株式会社フジキン
代表取締役会長 兼
執行役員会長 兼 CEO 小川 洋史 氏

足るを知るタイの幸せ、まだ足りないと感じる日本の不幸せ -戦後70年の年を迎える日本の未来に向けて-

タイが大好きで長年関わってきた関係上、「どうしてタイ何ですか?」「タイ
のどこが魅力ですか?」などと改めて素朴に聞かれると、突然答えに窮する
ことがある。

こうした質問には、いつもタイの良さを理解してもらおうキーワードを散りば
めて、お茶を濁している場合がほとんどである。こうした質問への答えは、た
とえば好きな人を語るときに、そのひとの性格や人柄のあれこれを具体的なエ
ピソードを交えて伝えるもどかしさとよく似ている。

以下では、もう少し掘り下げた地点にまで降りて、私なりに質問に対する現
時点での不十分過ぎる模範解答を見出してみたい。

まずタイには、日本と違って、得体のしれない人々を縛り制限する「世間
体」というものが見当たらない、と推測される。タイには、タイ独自の「世間
体」があるのではないかと思われる向きがあるかもしれないが、「世間体が悪い」
などと表現される、曖昧な「実体なき実体」のようなKY基準で、しかも
強い強制力をもつような価値規範はないと思われる。よく言われるように、
タイは、さほど人目を気にしない「ゆるやかな個人主義」の国である。他人とあ
まり比較しないで、自分の独自の価値基準をもちながらも、個々人が棲み分け
て、決してお互い干渉し合わないマイルドな「自立性」を日々の暮らしの中に
根付かせている。

ニューハーフの人が人眼を気にせず、広く社会的認知を得て存在できるの
も、異質を異質とも思わない、他者への眼差しがあるからであろう。

外国人に対しても同様で、異国の人という鋭い視線を向けることもなく、そ
の意味では、日本のように「国際化」や「グローバル化」などと声高らかに叫
ぶことがないほどに、昔からタイ人は「国際人」である。親子関係も日本のよ
うに湿っぽく粘着的ではなく、子供がある程度の歳に達すれば、それぞれの生
き方や暮らし向きには相互に干渉する度合いがはるかに少ない、極めて乾いた
関係となる。

タイには、日本のように「世間並み」とか「普通の生活」などといった社会
全体を覆う規範価値的な「モノサシ」は存在しない。資産・所得や社会的身分
格差を反映した各々の世界の中で、タイの人々は「足るを知る」幸せに満足し
ながら、日々のささいな出来事や語らいに大きな喜びを感じる本来の気質を
もっているような印象を受ける。タイ人がよく口にする「サバァイ」（気持ち
良い、心地よい）という言葉は、そのことを象徴的に言い表している。

日本のように、こうあらねばならないという「世間」からのプレッシャーを
内面化して、溜まったストレスを解消するための「ゲタゲタの大笑い」や「羽
目を外すバカ騒ぎ」もなく、最も大事にしていることは、節制された「足るを
知る」微笑みの顔である。タイ人のこうした幸福感は、広く深く浸透・定着し
ている上座部仏教の精神世界がかかわり、現状を追認した諦観（あきらめの境
地）や物質的なものの儚さを重視する心の構えが、たしかに影響を及ぼしてい
る側面があるかもしれない。それはともかく、高度成長期の右肩上がりの世界
は、二度と実現しない歴史的に特殊な条件のもとでのみ成立し得たことを知り
つつも、そこでの生活を「世間並み」「普通の生活」として「内面化」してい
る日本の場合、いまだ「神話の世界」の住人であるともいえる。そうした成功
体験の基準は、現在の日本の実態から大きくかけ離れていることに目を向け
ず、それを再び取戻し、さらに「まだ足りない」と競争に明け暮れるガンバリ
ズムは、どこかが根本的にズレているように思えてならない。このことは、ミ
クロレベルの個人や経済主体の革新的な創造的活動や頑張る精神を否定する
ものではない。

未来に向けて、日本の国づくりや、それにもとづく全国を視野に収めたマク
ロの経済活動の在り方と方向性について、いまだ広く世間で常識化している幸
福感を見直して、実態への冷徹な分析の眼をもちながら、「神話の世界」から
の大転換を図ることこそが、何よりも問われているといえよう。この点につ
いては、執筆の機会をいただけるのであれば、別途論じてみたい。

最後に、タイには、「国の礎」として、国王・民族・仏教の三位一体の絶対
的な公的価値があり、タイ人としての心の内面世界を支え、タイ人のアイデン
ティティとなっている。この公的価値のもとに、タイ人がタイ人として相互に
連帯することが可能となり、最低限これさえ護れば、それ以外の価値規範にも
とづく個人の「自由」は保証されている。タイ人の俗な日常生活における非日
常と思える勝手気ままで、ときには無軌道・放縦の「自由」が許されるのは、
国民がこの公的価値を尊崇し護っているからである。この意味で、タイでは、
日本にない心底の本来の「自由」を満喫できるという「幸せ」がある。日本の
場合、公的価値の空洞化のもとで、不自由な顔で自由を消耗し、高度成長期に
形成され、今や希少価値となった「幸せ」の基準をいまだ惰性的に追い求めて
いる。しかし、それを希少価値にしているのは、世間の実態なき空気である。
日本の戦後70年を迎える年にあたって、現在、先進国に近づきつつある中進
国のタイの国柄や人々から学ぶことは、あまりにも多い。

「農商工連携（6次産業化）のその後」



以前「てんこもり」110号（2013年11月）に「全日本農商工連携推進協議会」（6次産業化推進）活動について報告させていただきましたが、今回は改めて6次産業の具体的事例や、女性も含めた若い方々の農業参入についてご紹介したいと思います。

とは言え、日本農業の現状の厳しさは一層深刻です。この一年で農業就労者が12万人リタイア（離農）しています。最大の理由は高齢化です。日本の農業就労者はイギリス、フランス、ドイツに比べ65歳以上の高齢世代比率は約5倍60%超ですが、25歳から50歳までの現役世代比率は1/5約10%となっています。

農協の存在も今や共済を含む一大金融機関となり、かつてのようにきめ細かい農家に対する作付けや技術指導の役割は果たせなくなってきています。ご存知のように食料自給率は39%前後に落ちております。TPPの外圧に相まって農協にもメスが入り、その一部解体という方向が出てきました。

一方、若い方々が志を持って農業関連事業に参入し、誇り高く活躍している実態が燎原の火の如く広がっていることも注目すべきでしょう。彼らは正にビジネスモデルを創り農業ベンチャーを起こしています。既に上場成功した「オイシックス（有機野菜など食材の宅配・ネットスーパー）」や、「マイファーム」「らでいっしゅぼーや」等、後に続く企業も頑張っています。

特に農業女子（農ガール）の進出は目を見張るものがあります。今やヤンマーやダイハツといった農機具メーカーも荷台を低くした女性が乗りやすい耕運機や、日焼け防止機能付のカラフルなトラクターの開発を進めています。また、おしゃれ農作業着や、畦道に設置できるお洒落簡易トイレも扱われ始めています。

生産者と消費者をつなぐ売り場づくりも活発です。これも若手が主体的にNPOやソーシャルビジネスの形で、あたかも学園祭的なイベントとして肩肘はらず楽しく継続させています。それも単なる売り場としてだけでなく、出店者同士の情報交換やネットワークづくり、セミナーも併設した勉強会や、自然に寄り添う農法で作られた食材を中心としたメニュー開発や試食会といった「モノ」と「コト」をつなげた場を作っています。

例えば「ぐりぐりマルシェ」。毎月第2土曜日、難波神社境内にて「つながりから生まれる6次産業化」を実践されています（主催：グリーングッドリンク社）。機会あれば一度覗いてみて下さい。

このような地道な「農援隊」の存在は消費者の支持を受け、農家の生産や収穫のお手伝いをする「援農隊」の存在と併せて、農業再生に向けての心強い一歩になっていくものと期待します。日本の農業の夜明けははじまっています。

株式会社バンステーション 代表取締役 岡田政之

保育ジジイの日本経済・歪論（中）



（官製相場）日銀は新規国債の大半を購入、強引に金利を抑え込んでいます。事実上の「赤字国債の日銀引受け」です。また株式市場にもテコ入れをしています。個別の株式買入れは出来ないで、随時ETF（上場投資信託）を購入。市場は日銀の買入れをあて込み、海外投機筋は安心して指数平均の先物と現物の裁定取引に専念しています。マネーをジャブジャブ供給しても市中には回らず、金融機関は国債を競って購入、マイナス金利も出る羽目に。「円安による輸出振興」を本気で予想していた専門家の多さにビックリしました。「てんこもり」（2013/8）で紹介しましたが、資本金3千万円、従業員50人以上の製造業の1/4は海外に子会社を持って現地化しています。円安誘導は、例えば産業界でも、輸入原材料の上昇や中小企業の経営悪化、産業構造全体の転換遅延など、様々な弊害が出ています。また消費者物価の上昇で、実質賃金は18ヶ月下落、内需にも悪影響が出ています。もし「官製相場」が崩壊したら、円は・・・国債はどうなるのか・・・恐怖です。当局が最も気にしているはずの海外の評価は・・・？長期金利（10年国債=0.39%/2/20現在）を強引に抑え込み、物価上昇の2%目指す・・・？どこか変だとは思いませんか？

（税制の歪み）上場企業の純利益が二年連続で過去最高、「東証一部」だけで26兆5千億円になる見込み（2/14付の朝日新聞）。2015年3月期の上場企業の株式配当は7兆4千億円。法人税は上場・非上場を含め10兆9千億円を予定（平成27年度一般会計予算）。「てんこもり」の前号で紹介した推薦図書「税金を払わない巨大企業」（富岡幸雄・著）では、大企業への課税負担を軽減し、消費増税にシフトする日本の「税制の歪み」を具体的に指摘しています。

（年次改革要望書・日米経済調和対策）この言葉を耳にされても、その内容を知っている人は皆無に近いでしょう。マスコミも報道しません。

私も「拒否できない日本」（関岡英之2004/4文春新書）という優れた啓蒙書を読むまで知識がゼロでした。ぜひ検索してみてください、「米国大使館・東京/政策関連文書」「日米経済調和対策」で。

（TPPの本質）米国の国益に添った内容で「米国による、米国のための、米国に都合のいい」通商条約です。詳細は市販の解説書に譲りますが、内容は「外資（米国の多国籍企業など）の経済活動を妨げる障害は撤廃する」「そのために国内法を改正する」に尽きるかと。TPPより以前から、混合診療の全面解禁、営利（特に外資）病院の認可、新薬・医療機器などの早期認可、農協潰し、共済制度潰しなどを要求し続けてきました。郵政改革は大騒ぎになりましたが、また元に戻ったようです。内政干渉の域を遥かに超え、是正・勧告・指導と多岐に要望が羅列されています。そこには「外交」という概念はありません。1994年の宮沢・クリントン会談から始まり、毎年のように米国から年次改定要求が出され、歴代の内閣は忠実に実行してきました。米国のTPP推進団体はNFTC（全米貿易協議会）。全米で最大の財界団体で、多国籍の大企業が中心です。

（ISD=Inter State Dispute=条項など）最大の課題はISD条約などです。「投資家対国家紛争解決条項」と訳されています。要は「外資企業が現地政府を訴える」ことが可能になります。それを裁くのは、世界銀行の下部組織、「国際投資紛争解決センター」です。先例があります。1994年、米国とNAFTA（北米自由貿易協定）を締結したカナダ、メキシコが36件、米国政府へ15件の訴えがありました。米国は敗訴ゼロ。逆に米国企業の請求棄却は6件に過ぎず、勝訴は6件、和解も含め、米国企業が敗訴した例は無いとされています。ちなみに世界銀行の総裁は米国人の指定席です。また身近では、知的財産権の保護を強化してジェネリック薬品潰しも意図されています。他に「ラatchet（Ratchet）条項=元には戻れない」=TPPで決めたことは変更不可とか、「スナップバック（Snapback）条項（手の平を返す、但し米国だけ）」など、米国のご都合主義が盛り込まれています。すべて秘密交渉であり、内容は一切明かさず。日本経済へのTPP効果は、一説によると10年間で3.2兆円とされる。わずか3.2兆円です。「日本の乗用車への輸入関税（2.5%）を10年超で撤廃、来月合意へ大詰め」（2/2日経）。北米ないしメキシコなど現地生産が進んでいるのに、こんな程度でお茶を濁されているようです。

（グローバル化）「ロン・ヤス」と呼びあったり、プレスリーの真似をして大統領のごきげんをとる、果てはEUが疑問視したイラク戦争を真っ先に支持するなど、対米従属の姿勢が極めて鮮明です。グローバル化とは聞こえはいいが、要するに米国様式への変更です。EUが、日本にこんな高圧的な態度で交渉してきたでしょうか？政権維持のため、お墨付きが欲しかったのでしょうか・・・。「万骨（大半の日本国民）枯れて、将（大企業、外資）生きる」。

（2015・2・27記） <続く>

羽世田 敏四郎（元・ベンチャーキャピタリスト）

～VEC関西より～

・フジキン小川会長、ますますご発展です。お互いVEC関西の25年に亘る戦友です。又、タイのこと日本の農業のこと経済のこと、今月号も堂々とした論文ばかりの「てんこもり」です。中身が一段と充実してきました。（本田）

・毎年4月には京都に行ってます。今年は観光客（外国人）で華やかな着物を着てる人の多さにビックリしました。足袋と草履、日本人でも歩きにくいと思うのですが、やはり京都では着物を体験したいと思われるようです（舞妓さんのように）！大阪では何を体験されるのでしょうか？都構想もどうなるのか判りませんが、もっともっと大阪の良いところもアピールしてほしいものです。（藤本）

・先日新聞でアメリカ・NYで「大人の塗り絵」が大流行。又その塗り絵の本は入手困難とか・・・やはりどの国でも「癒し」を求めておられる方が多いのか、私も探究している色彩心理学で「塗り絵」に色を塗る作業からス

トレス解消につながり、次に選んだ色から深層心理の解明と面白い話は満載です。ご興味のある方はVECスタッフ・濱本までご一報下さい。（濱本）

・前述のとおり株式会社フジキン様は5月1日で創業85周年を迎えられますがVECも7月1日で創立40周年となります。今までのご支援ご協力に感謝申し上げますと共にこれからもスタッフ一同お役に立つVECを目指します！（澤村）

<交流会の予定>

6月は開催ございません。7月3日（金）で企画中です。

一般財団法人 ベンチャーエンタープライズセンター関西支部
〒541-0053 大阪市中央区本町2-3-6 本町ビジネスビル9階
TEL 06-6263-0366 FAX 06-4964-6293